

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	朝鮮語と私 <一般>
Author(s)	関本, 至
Citation	広大言語 , 11 : 41 - 43
Issue Date	1971-12-06
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046378
Right	
Relation	



朝鮮語と私

関本 至

朝鮮半島は、現在、政治的には「大韓民国」と「朝鮮民主主義人民共和国」というイデオロギーを異にする2つの国家に分かれている。いわゆる南朝鮮と北朝鮮とである。世界にはいくつかの分裂国家があるが、1つの民族が望まずしてこのように分割されている状態は、その人民にとって大きい不幸であることはもちろん、世界のすべての人々にとってもまた不幸なことだと言わねばならない。

「韓国」では「朝鮮」の名称は忌まれる。「大韓民国」国号の誇示と「朝鮮民主主義人民共和国」国号への反撥もあろうし、日本統治下での悪い思い出と重なるからでもあろうか。逆に「北鮮」の人には「朝鮮」はすでにその国号の一部であって、こだわりはないはずだ。歴史を繙くと、朝鮮あり、局地的ながら百濟、新羅、高麗などもあった。われわれとしてはこれを何と呼べばよいのか、時としてまどいを感じることもある。しかしここでは地理的呼称としての「朝鮮（半島）」をもととし、そこにいる民族を「朝鮮人」、その話す言語を「朝鮮語」と、一応よぶことにしておく。

私は満2歳9ヶ月のとき、両親に伴われて朝鮮に渡った。爾後満18歳のときまで、まる16年間を、つまり幼児期と少年期のすべてを朝鮮で送ったのである。朝鮮は私にとって第2の故郷というよりも、むしろ第1の故郷と呼んでよいかもしれないのだ。木が少なく岩の多いその山々、澄み切った紺碧の空、雪多い冬の寒さ、それらが私の少年期をつつむ自然であった。中学生になってからは都会に住んだが、小学生時代には比較的小さい町にあり、一時期はその郊外に住んでいたので、通学の往復には朝鮮人家屋の間を通り、そこで交わされる朝鮮語を朝夕耳にしたものである。市場からの帰り濁酒に酔って嫺々と民謡を口ずさみながら家路につく朝鮮人の歌声を寢床の中で何かもの悲しいと聞く夜もよくあった。学校のクラスにもつねに数人の朝鮮人学友がいた。学校以外の友人も何人かおり、後に駅員になったN君とはもともとテニス仲間で、この人との交通は私が日本に戻ってからずっと続いた。朝鮮語を聞き、朝鮮語をまなぶ機会はいくらでもあったのである。言語に興味ある者にとって、それは宝の山にいるようなものであったのに、どうしてもっと朝鮮語を覚え込もうとしなかったのかと今になって悔やまれてならない。

しかし朝鮮に住む日本人は多かれ少なかれながしかの朝鮮語をおのずと習い覚えた。といってそれは音韻法上も語法上も正しい朝鮮語からはかなり外れたものが多かったが、そうしたブロークンな朝鮮語（とくに単語）は、日本人同志の間でも日常よく使われていたので、私の朝鮮語もまづはそのたぐいのものにすぎなかったのである。

それとは別に朝鮮語を一応正規に学ぶ人もいなくなかった。学校の先生や官吏にはある程度朝鮮語の知識が必要とされ、そのための講義や試験などもあった。（私が「内地」に帰ってから後、事情は次第に変化し、最後には朝鮮語の使用を弾圧するまでに立ち至ったらしい。）田舎に住む日本人には、事の必要上、朝鮮語の話せる人もかなりいた。私の小学校の友人で朝鮮語の実にたくみな男がいたが、彼は家に帰ると朝鮮人にしか遊ぶ仲間がいなかったのである。子供の言語への順応力

は大きい。私も中学生になってから、何回かは朝鮮語を学ぼうと試み、友人からその~~単語~~や発音を学んだこともあったのだが、ついにはならなかった。

日本に戻ってから、私はある朝鮮のお坊さんに朝鮮語を習った。1年間ほど、毎週1、2回、テキストを使つての勉強だったが、そのお坊さんには発音をこまかく矯正された。

こうして私には2種類の朝鮮語が内にある——1つは少年時代に覚えたブロークンだが自然に口に出る朝鮮語と、青年時代に学んだ正規だが主として目から入って、ほんとに身にはついていない朝鮮語とである。この2つは交わり重なりながらも、いわば何か別々の体系として私の中にある。今でも書物の朝鮮語を見ていて、まるで初めての未知の単語だと思っていると、意外や少年時代になり覚えた単語であることに気づいたりする。だが、朝鮮語は、私にあって、結局ものになってはいない。なっていないが凄しい言葉である。郷愁を誘う言葉である。朝鮮語への回帰心は、ほかの言語をやりながらも、折にふれては私の心に立ちあらわれてくる。1、2年前に、大学院の諸君と朝鮮語の勉強を一緒にしたのもそのあらわれであつたのだろう。機会あらばもっともっとやってみたいと思うのである。

朝鮮語の系統論^は、日本語のそれと同じように深^に究^められている。いろいろの説は出ているが、きめてとなるものがない。日朝両言語の関係となると問題はさらに多い。両言語とも漢文化の大きい影響を受けたために、多数の漢語を共有していることは当然である。(しかも日本が漢文化を受け入れたのも最初は朝鮮半島を通してであつたことは人のよく知るとおり。)しかし固有の(と考えられる)語彙において、両言語間にその音韻対応関係を見出すことは、さまざまの試みがおこなわれて来たものの、局部的にしか成功してはいない。(局部的にしかということとは、結局において確立されていないということである。)

語法が似ていることは、多くの人が指摘するとおりである。日朝両言語に通ずる人ならば、書物を読みながら一方を地方へ移すことはきわめて容易である。語順が同じで、助詞を操作する原則も同じで、加えて共通の漢語があるからだ。しかしこまかいポイントになるとそう簡単には行かない。日本語で「おたまじゃくしは蛙になる」のように「に」を使うところを、朝鮮語では「が」を使う、つまり「おたまじゃくしは蛙がなる」と直訳される言い方をする。助詞での数や種類も合致せず、似たような助詞でも、こまかい使いさまの差異があるのだ。この構造上の微差といつてもよいものの中に、両言語の(ひいては言語一般の)意味論その他の研究にとっての重要な秘密がかくされているようにも思えるのである。

朝鮮語には日本語に似た敬語法がある。日朝両言語の敬語法の成立には儒教思想が背景をなしていると考えられる人もあるが、とにかくそれは身分の上下を重んずることをプリンシプルとしている。だが日本語の敬語法にはさらに身内と他人を区別する原則がもう1つ強くからんで来ている。それに対して朝鮮語では、年上、年下の関係が今1つの原理をなしているように思われる。(敬老思想の裏うちか。)だから自分の親や兄のことを他人に話すとき、日本語では「チチ」とか「アニ」と言いが、朝鮮語では「オトウサマ」「オニイサマ」に当る表現で言い、また話し相手の子供のことを言うには敬語を用いない。敬語的表現構造のずれが、日朝両言語間に存するわけで、それは両言語を話

す人々の考え方や社会構造のずれを反映し、それらと呼応しているといえようか。

物売りの声は、日本語で「何々ありませんか」の形をとるに対して朝鮮語では「何々買いなさい」であり、中国語では「何々売ろう」、英語では「何々ここにあり」という言い方をすること、およびこれらの表現とそれぞれの言語を話す民族の精神構造との間のありうべき関係（これは前記の敬語法の場合と無縁ではないと私は思う）については、例年話をして来ているが、これらさまざまな問題の考察はまた別の機会に譲りたい。

われわれ日本人は人から物を受けとるとき、いわゆる「お頂戴」をする。つまり掌を上にして両手を差し出す。そしてその両手を重ねるか、あるいは左右に並べるのが丁寧なやり方である。朝鮮人も両手を出すが、右手と左手をずらせる。一方の掌が他方の手の手首の横あたりに添えられるのである。このちょっとしたちがいが、それがまぎれもなく両民族の習慣を分ち、民族帰属のちがいを示す。

日本人はお客に行ったとき、玄関で外向けに履き物を脱ぐ、もしお客が内向けにぬいであったら家の者が外向けにそろえるのが客への礼儀であろう（帰るときにすぐはけるようにとの配慮から出たものであろうか——人に書類などを渡すとき、相手がすぐ読めるような向きで渡すのも同じ考えから来たエチケットであろう。書類にかぎらず、鋏、鉛筆などでも同様である。）ところが朝鮮ではこれをやると大変だ。靴を外向けにすることは早く帰れということを意味する。ぬいだ靴の置き方の方向は両民族で全く違った意味をもつのである。ともかくこれは一種の風習であって、そのようなことに無関心な民族にとってはどちらでもよいことである。西洋人は人を訪問しても靴をぬぐことはないから、このような問題は起こらない。いや靴をぬぐこと自体が野蛮とされ、それが問題の中心になるであろう。ところ変われば風習変わるである。風習とは、伝統とは、礼儀とは一体何なのか？ 精神さえよければ形はどうでもよいのか？ それとも形なくしては精神なしなのか？ 形をととのえることではじめて精神はととのえられるのか？ さらに新しい精神を創り出すためには、古い形は破壊されなければならないのか？ それとも精神と形は別のもののなのか？ 「朝鮮語と私」と題しながら、話は思わぬところに来てしまった。私が言いたかったのは——言語は文化の中にある。言語と文化の関係、つまり各国民各民族の言語形式と文化形式の関係は言語を追求する者にとって大きい課題である。そうした問題は、具体的な言語考察、文化観察の中から出て来なくてはならない。日本語と朝鮮語の間には、両者が相似の言語であるだけに、かえってそのこまかいちがいの中に、さぐるべき重要な問題がかくされている。朝鮮と朝鮮語に多少ともかかわった者として、そうしたことをいつかは考究してみたい願望が私にある。——ということである。